

1996年10月にリリースされた THE BEATLES ANTHOLOGY 3 と競合する懸念が収まった 1997年春、ポール・マッカートニーの新作が満を持して、続々と発売された。関連はないが、1997年3月にナイト（騎士爵）の称号を英国女王エリザベス2世から授与された翌月以降の出来事。

## 〔M-267〕 YOUNG BOY

先陣を切って1997年4月にリリースされたシングル（3種類）のA面曲。

歌詞に登場するのは、まず、成長して大人になりかけの青年。愛を見つけようとしている。そして、彼を見守る父（話者）。加えて、彼の母（話者の妻）の存在がブリッジで感じられる。それぞれ、マッカートニーの息子ジェイムズ、マッカートニー自身、マッカートニーの妻リンダがモデルと考えられる。このナンバーが録音された1995年2月の時点で、息子ジェイムズは17歳だった。

ヴァース2の前半の詞に戸惑うリスナーが少なくないと思われる。案の定、TOCP-40040 および TOCP-50200 付属のリーフレット（木戸敦子対訳）には、『でも 彼にはまだ何も判ってないだろう』という怪しげな和訳が載っている。But don't you think he doesn't understand that he wants someone. は、疑問ではなくて、命令文のはず。「でも、誰か特別な人を求めていることに気付いていない、などと思っ  
てはいけない ⇒ でも、誰か特別な人を求めていることに気付いていないわけではないんだよ」というような意味である。ところで、wants someone は、直前のラインにあった from someone と、不完全ながら押韻している（om - onts）。

ブリッジは、話者から聞き手へのメッセージ。素晴らしい相手に恵まれている話者が、愛について、そしてパートナーについて、どのように考えているかが述べられている。Find love — a perfect combination.（愛を見つけろ。互いに完璧なカップルとなれるような）、Find love — a cause for celebration.（見つかったら、これほどめでたい事はない）、Find love — a source of inspiration.（愛があれば、いろいろとインスピレーションが湧いてくるよ）などである。

〔M-271〕 I LOVE THIS HOUSE

〔Obu Joobu Theme Song〕が流れた後、DJであるマッカートニーが番組の開始を告げる：OK. Welcome to the show “Obu Joobu.” This week, fun-packed show, item number one. 。そしてかかるのが、このレコード。

歌われているのは、マッカートニーが1973年に購入した農場の家屋と思われる。場所はロンドンの南東、東サセックス州のピースマーシュ。1984年録音の時点で欠陥だらけということは、元々が年代物の中古物件だったのだろう。

ヴァース1は Cracks in the pavement. Cracks in the road. Cracks in the ceiling, where the bathtub overflowed. 。辺りの道も家の天井もひびだらけと言っている。

ヴァース2では、指摘する欠陥が穴へ替わる。次のごとし：Holes in the gutters. Holes in the slate. Holes in the carpet. But I won't evacuate. 。それでも。話者は退散しない。

理由は、話者が愛する住居だからだ。繰返し部でいわく：I love this house. It's where I'll stay. Eat and sleep the night and day. I love this house. It's where I'll be, for you to spend some time with me. I love this house. 。

ヴァース3は Damp in the basement. Damp in the hall. Damp in the living room that's climbing up the wall. 。家中が湿っぽいようだ。このことは、前述の地名から想像できる。marsh（湿地）という語を含んでいるからだ。

湿気が多ければ、金物が錆びるのも速い。そこで、Rust in the drainpipe. Rust in the spout. Rust in the radiator still won't get me out. というヴァース4になる。

コーラスの2回目とヴァース1の2回目との間にブリッジがあり、ここでは気候が問題になる。次のようだ：Hot in the summer. Rattling windows, teeth and knees. Perfect place for cat and mouse. But never mind. I love this house. 。2番目のラインは、冬には冷たい風が吹く、と言っていると考えられる。

[S-042] **KING OF BROKEN HEARTS**

失恋を嘆く内容をスターが歌うと、真実味が感じられる。もてはやされるようになる前の経験が物を言っているのではないか?という推測をしてしまう、私は。

歌詞は単純。それでも、PHCR-1640 付属の対訳と私の解釈があちこちで異なる。その点に焦点を当てて記しておく。

ヴァース 1 における Where's someone that I can love? および I'm the king of broken hearts. についての『本気で』と『人呼んで』は、ともに対訳者の勝手な付け足し。結果として誤訳である。原詞には、これまで遊び半分だったような背景も、人の噂になっているような言及もない。

ヴァース 2. 『呼び鈴が鳴るのをずっとずっと待ってる』も誤訳。そもそも、I was waiting for the bells to ring. (鳴る時が来るのを待っていた) は過去時制。そして、これが玄関の呼び鈴 (doorbell) のことならば、普通、単数形で用いる。複数形ということは、未だ歌が始まったばかりだが、私が最初に思い浮かべるのは、教会における結婚式の鐘 (wedding bells) である。

この想像に無理がないことが、すぐに判明する。少し後の (I was) praying that she'd wear my ring. は結婚指輪 (wedding ring) のことで、waiting for the crowd to sing とは、参列者による讃美歌の斉唱のことと考えられるからだ。

ヴァース 3 の She just walked right out the door. 以降から分かるのは、同棲していた女が出て行ったことと、その際に、話者に手紙を渡したか、もしくは留守中に置き手紙を残したこと。おそらく、結婚が間近に迫った時点で、心変わりしたのだろう。なお、『そこのドア』は、ほぼ誤訳。私たちリスナーが話者の部屋の中で話者と同席しているのではない。よって、単に「ドア」である。

女の心変わりは、話者にとって突然のことだった。そのような事象が一般的にあり得ると言っているのが、ヴァース 4 冒頭の Look how fast the tide can turn. (形勢がすぐに変わることもある)。続く Some people never learn. は、脚韻優先の、ぎこちないラインのように思える。しかし、自身の反省の弁と受け止めてやれば、さほど悪くない。そして話者は、失恋の世界に身を置きながらも、新たなスタート

の the law が無冠詞複数形になるのも疑問だ。まして、devils (悪霊) との対比になっている。ここは believe in lords (支配星というものを信ずる) かも知れない。占星術における dominant planets のこととなる。

ポストコーラス 1. Ain't no room service here. の後にある結末が、前述のブックレットから漏れている。またしても母親に言及した Think of your poor old mom in the kitchen for Christ's sake. と聞こえる。

ヴァース 2 も、長年レノンに親しんでいたリスナーにとっては、驚くような内容ではない。〔Imagine〕で聞いた Imagine there's no countries ... nothing to kill or die for, and no religion too. (© 1971 Lenono Music) (国というものがない世界を想像してご覧。そして宗教もない世界を。そのために人殺しをしたり、命を捧げたりする対象がない世界だよ) の言い替えである。また、if you won't be like me (俺のようになりたくないと言うんだったら) に表われている自信は、〔Working Class Hero〕末尾の If you want to be a hero, well, just follow me. (© 1970 Lenono Music) (英雄になりたければ、俺に続きなよ) と同じ線上にある。その後は、Get it? (分かったかい?)。

ポストコーラス 2 の締め括り and that's all there is to it (それだけだよ) の後に語りがある。対訳が不正確なので、指摘しておきたい。So get right back here, and it's in the bloody fridge. は、『落ちついてよく考えてみな。こんなにめっちゃ便利な冷蔵庫(後略)』という意味ではない。正訳は「だから、こっちへ戻って来いよ。夕食は冷蔵庫の中にあるよ」である。『テレビやら贅沢な夕食やら』も誤訳。TV fucking dinner とは、TV を見ながら(電子レンジを使って)作る夕食のこと。つまり、贅沢にはほど遠い、冷凍食品である。この TV dinner という言葉は、ポール・マッカートニーの〔My Brave Face〕の中にもあった。

ヴァース 3 はブックレットに載っていない。と言うか、ヴァース 1 と同じものを繰り返し印刷している。これは不適切だ。なぜなら、ヴァース 1 とは細部で異なっている。私の聴き取りによると: You tell me you found Jesus, Christ! Well, that's great, and he's the only one. You say you just found Buddha and he's sitting on his ass in the sun. You say you found Mohammed, kneeling on a bloody carpet facing the east. You say you found Krishna with a bald head dancing in the

インの意味は「僕が自分を見失うほど没頭するのは、君の存在」である。

いずれにしても、share nightmares（悪夢も一緒に見る）とか take it for better or worse（悪いこともあるかも知れないけれど）といった暗い話は、レノンの本心であったとしても、相手が喜んで聴くとは思えない。一方、将来に向けて新たに羽ばたくことを歌う〔Starting Over〕は、相手にとっても、レコードのリスナーにとっても、心地好い。レノンが〔My Life〕に満足しなくて、幸いだった。

トラック冒頭でレノンがオノに対して Okay, but we like to, we like to have these things on records. Let's not get so hysterical this time. と言う。異常に興奮したのは何についてだったのだろうか？〔Serve Yourself〕の歌唱だろうか？

#### 〔L-087〕 LIFE BEGINS AT 40

演奏に先立って、We'd like to welcome you here to the Dakota Country and Western Club. とレノンが冗談を言うように、C&W 調のナンバー。彼の私生活までは精通していない読者のために書いておくと、この Dakota は、ニューヨークで居住していた The Dakota (Apartments) のこと。南北ダコタの2州がある地域ではない。その後は、私の耳によると、次のように言っている： And in return for Miss Yoko Ono's wonderful gift of a very strange hail, I'd like, this morning, to sing you a little ditty that occurred to me in the throes of my sleep. It's called "Life Begins At 40."

歌詞の中で、私にとって腑に落ちない箇所がある。それは、ヴァース 3 の最初のライン。ブックレットには『Well, I tried to sweep the slate clean 過去を清算しようとしてきた』と過去時制になっている。しかし私は、現在時制の Well, I try to sweep the slate clean ...（毎日、出直しを図っている）であろうと考える。なぜならば、そうでないと、続く条件文 If that don't work, I'll jerk around until my next birthday.（うまく行かなければ、次の誕生日までぶらぶら過ごさ）との繋がりが悪いからである。いずれにしても、『そうすれば 次の誕生日までぶらぶら過ごせると思ってね』は誤訳である。

## ビートルズ・ソロ作品読解ガイド(5) 内容見本 著作権保護コンテンツ

〔Dear John〕を自身への甘やかしと評したが、レノンが自身を戒める決意を述べたとも解釈できる語りが、JOHN LENNON ANTHOLOGY に収録されている。CD4 枚目のトラック 20 である。標題は〔The Great Wok〕。活字にしてしまうと効果が薄れるが、a large wok（大型の中華鍋）と the Great Work（大いなる業）とを掛けたものと思われる。非常に興味深いので、ここで紹介と説明を行うことにする。レノンが、リシケーシュなまりと思われる発音で語る内容は、下記のとおり。

Hello, hello, testing, testing. という機器の試験の後に、次のような前置きがある：  
At this time of year ... oh, let me first introduce myself. Maybe you have heard me before. I am the great wok. And as you know, the great work must be done. 。この the great work を the Great Work と書くならば、セレマ神秘主義における「大いなる業」を指す。

セレマと聞いて驚くには当たらない。この宗教を創設したオカルティスト著述家アレイスター・クロウリーの肖像が、アルバム SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND のカバーにあった。最上段の左から二人目である。彼を選んだのはレノンと推測されている。また、レノンは、ヨーコ・オノの影響もあって、占星術に傾倒していたらしい。

前置きが終わると、時候の話。次のように聞こえる： Now, at this time of year, when Brahma is in Brahma. The day of Brahma is said to last one thousand years, and its night is of equal length. Well, for us human beings, this is the end of the year now. And our minds turn towards what is laughably called the future. No mind can comprehend the infinite and absolute 不明 as we say in the Himalayas. 。太陽暦で年末に録音したことが分かる。不明と記した部分は、ヒマラヤで話すヒンディー語らしく、私書き取ることは不可能。

そして新年の抱負が語られる： Now let me tell you. My resolution for the year 1979 is to renounce completely everything. But complete luxury and self-indulgence. Now I suggest this is going to be very, very difficult. Very difficult indeed. But I feel it my, my duty, not only as a human being but as a person. 。最初の but は、「～を除いて」という意味の前置詞ではなくて、強調を表わす接続詞と捉える。そうしないと、現時点では、意味が通じなくなる。But と

は天使に構わずに悪行を続けるということになってしまう。

末尾の Listen what I'm saying to you. Run. Run, devil, run. は、私の読みによると、「僕の言うことを聞いて、逃げろよ。Run, devil, run と、おまじないを唱えながら」というような意識になるだろう。

熱狂的な伝道師がヴァース 1 に登場する。TOCP-65269 付属の説明書（木戸敦子対訳）には『ペンテコスタの女』と記されている。なぜ、ペンテコステ派系の宗教家と言えるのか、私にはまったく分からない。マッカートニーは a holy roller としか呼んでいない。

ヴァース 2 についての対訳に対して、私は三つの点で疑問を感じる。まず、『彼女に落胆させられたという』。そのような背景は歌われていない。私の推測では、she brought them down は「彼女はふたりを（町へ）行かせた」という意味。週末であろう。そのように弟妹に優しいからこそ、後にふたりの保釈金を払うために町へ出向くのだと思う。

次に、この場合の They got into a fight. は、『喧嘩になった』とは限らない。他人と喧嘩したことも十分に考えられる。よって、「喧嘩騒ぎを起こした」のほうが適切だろう。また、『保安官は彼らに牢屋での一泊を勧めた』も不適切。「郡保安官がふたりを一晩、留置した」のだ。『勧めた』のであれば、姉が保釈に来る必要はない。文脈、状況、背景を考慮しないで安易な逐語訳を行うと、このような和訳になりがちになる。

ヴァース 3 では、分詞構文 all of them determined to deliver the goods に注意。定冠詞付きの複数形 the goods は、通常、『いいこと』ではない。「商品」である。少し前に picking cotton for a living（生業として綿花を摘む）というラインがあったことから、綿製品と考えられる。

良く書けたストーリーの部類と言ってよいだろう。ヴァース 1 で You can hear her screaming any time of night or day. Run, devil, run ...（昼も夜も大声で言う。Run, devil, run と）と聞いた時に抱いた私の不安は、無駄だった。

[S-059] **PAX UM BISCUM** (Peace Be With You)

アルバム I WANNA BE SANTA CLAUS の 12 曲目で、最終トラックになる。

フランス語やスペイン語を知っている人だったら、このタイトルはラテン語に見えるはずだ。pax (平和) は、仏語 *paix* や西語 *paz* の語源である。副題が *peace* で始まっているので、ラテン語に違いないと思うだろう。

ところが、文字の綴りを注意して見ると、「平和でありますように」とか「あなたがたの無事を祈ります」という意味としてよく知られているラテン語と異なる。*Pax vobiscum.* でないのだ。ちなみに、*vobis* は二人称複数の与格(あなたがたに)で、*cum* は「〜と共に」という意味の前置詞。人称代名詞と結びつく時は後置きの一語で綴るので、*cum vobis* ではなくて、*vobiscum* となる。

タイトルの意味が副題どおりであるならば、何らかの書き間違いではないだろうか？

さて、CD のインサートにはヴァース 1 とヴァース 8 の詞しか記載されていない。私の聴き取りによると、ヴァース 2 は *La pace sia con voi.* (イタリア語) の繰返し。ヴァース 3 は *Que la paix soit avec vous.* (フランス語) の繰返し。ヴァース 4 は、私には 1 語もつかめない。ヴァース 5 は *La paz sea con vosotros.* (スペイン語) を繰り返している。

ヴァース 6 の最初のラインは *shalom* で始まる。ヘブライ語だろう。次のラインは *Friede sei mit ihr.* (ドイツ語)。というように、どれも *Peace be with you.* の外国語版になっている。

ここで、*Merry Christmas, Barbara.* / *Merry Christmas, Rich. I love you.* というスターキー夫妻の会話が挿入。その後がヴァース 7 なのだが、残念ながら、私が知っている言語ではない。

その次のライン。前述の説明書きには『Unbearable, great』と記されているが、私には Unbearable or great (耐えられないほど酷いこともあるし、素晴らしいこともある) と聞こえる。ちなみに、映画の主人公は実業家でプレイボーイである一方、精神障害を負っている。

ヴァース 2 後半の You've gotta love every hour. You must appreciate. (人生のその場その場を楽しまなきゃ。その価値を認めるべきだよ) は、二つの台詞に由来しているかも知れない。ひとつは、親友が言った and I know sour, which allows me to appreciate the sweet 。もうひとつは、知り合った女が言った Every passing minute is another chance to turn it all around.

ミドルの This is your time. This is your day. You've got it all. Don't blow it away. は、話者を含む万人に当てはまりそうな忠言になっている。

ヴァース 3 は、再び、マッカートニーがレストランで感じた印象ではないだろうか。最初のラインは、私の耳が正しければ、『Melted tin leaves Cast your fortune in a glass of wine』ではなくて、Melted tin beads cast your fortune in a glass of wine. 。スパークリング(発泡性)ワインを使う占いのことではないかと思う。だが、そうだとすると、具体的なことは知らない。tin beads とは、錫玉だろうか、沈めたマリファナから出る泡だろうか、それとも … ?

snail or fish (エスカルゴか魚) は、料理の選択だろう。balloon or dolphin も同様。『風船にイルカ』ではなく、balloonfish or dolphinfish (フグかシイラ) のことである。

最後のラインについても、TOCP-66110 の説明書きは不正確と考えられる。まず、『See a silver shine』という聞き取りだが、私には See your silver shine. と聞こえる。意味を考えても、a silver (銀メダル) という可算名詞ではありえない。your silver (あなたが使っている食器) という不可算の集合名詞である。

ところで、フォーク的な曲調は、この映画のキャメロン・クロウ監督の要望だったとのこと。

〔H-129〕 **ANY ROAD**

この楽曲は音盤化される前に世に出ていた。1997年7月24日、シタールの師匠であり親友でもあるラヴィ・シャンカル（Ravi Shankar）の新作をプロモートする目的で、ハリソンはシャンカルと共に米国のケーブルTVネットワークVH1のロンドン・スタジオを訪問。インタビュー番組録画の際、予定にはなかったのだが、たまたま近くにあった生ギターを使って、〔Any Road〕、〔If You Belonged To Me〕（トラヴェリング・ウィルベリーズのナンバー）、そして〔All Things Must Pass〕の弾き語りを行ったのである。ヴァース2とコーラス2を省いていたが、残りの歌詞は後に制作されたCDと変わらなかった。

さて、前述のCD説明書きには『“Lord”（神）と“Road”（道）をかけ』と書いてある。私にはそう思えない。ハリソンを含む英語話者にとって、その二つの言葉は日本語感覚の‘ロード’ではない。それぞれ [lɔ:d] と [róud] という発音の、似ても似つかない異語である。語尾の文字が同じであるだけで、まともな押韻にもならない。

最初に、コーラス1とコーラス2の冒頭にある But oh, Lord について。対訳では『でも神よ』となっているが、この Lord は神への呼び掛けではない。「まったくもって」というような意味を表す間投詞である。そう断言できるのは、その後に出てくる you のすべてがリスナーを指すことが明らかだからだ。神は、いかなる代金も払うはずがないし、神自身が向かう先を知らないはずもない。any road に身を委ねることもありえない。ブリッジで言及されている事柄も、人にはありがちだが、神に当てはまるわけがない。加えて、神は、ヴァース4内の you に対する命令文 Bow to God and call him Sir. において、三人称で書かれている。

次に、この歌における road だが、私が思うに、信仰心のゴールへ続く道とは限らない。リスナー一般は、「人生の道筋」と解釈してよいだろう。具体的なことと、到達を目指す場所、状況、もしくは境地（there）は、個々の考え方による。それがハリソンの意図だと、私は考える。詳しい読解を試みよう。

演奏の前にハリソンが Give me plenty of that guitar. （あのギターをたっぷり出してくれ）と言う。私の想像によると、ポーカルを入れる準備ができた彼が録音

ミケランジェロの作品だったということは、場所はシステーナ礼拝堂ということになる。

ヴァース 2。(I) arrived believing from home は inside St. Peter's Dome との脚韻のためだが、そのまま読むと、サンピエトロ大聖堂を見学するために、信仰心を抱いて、ローマへ来たことになる。旅先で立ち寄ったわけではない。ところが、自身を claustrophobic and ex-Catholic (元カトリック教徒) と形容。これでは *believing* と矛盾する。

ブリッジ 1 は、ローマ教皇庁の閉鎖性と隠ぺい体質に言及していると思われる。Puff of white smoke knocked me out. は、TOCP-67074 付属の対訳では『白い煙をぷっと吹きかけられてぼくは気を失った』となっているが、一体全体、どんな魔術なり化学物質をかけられたと言うのか？ 私の読みは、「白い煙が出るという話を聞いて、僕は唾然とした」である。これは、教皇の選出会議（コンクラベと言われる）が密室で行われ、未だ決まっていなければ、システーナ礼拝堂の煙突から黒い煙を、決まれば白い煙を出すことによって外部に知らせる、という慣習のこと。私が知ったのは、1978 年、ヨハネパウロ 1 世が選ばれた時だった。

The truth is hiding, lurking, banking. における banking（傾いている）は、同綴同音異語の banking（銀行を経営している）と被せてあると考えられる。バチカン銀行の闇について、ハリソンは 1970 年に発表した〔Awaiting On You All〕の中でも歌った（“ビートルズ・ソロ作品読解ガイド”（第 1 巻）参照）。

ヴァース 3。One Our Father, three Hail Mary's, each Saturday night とは、土曜日の夕方ないし夜に、カトリック教会で行われるミサにおける祈禱のこと。私は参加した記憶がないが、‘主の祈り’が 1 回、‘アヴェ・マリアへの祈り’が 3 回あるように読める。

次に、ギターのリズムに被せてハリソンが何か言う。私には Let's hear it の後の 5 音節、そして Play it と baby との間の 1 音節（card か？）が聞き取れない。

ブリッジ 2 の I wish somebody would tell me that it's only a show. は、話者が聞きかじったことが単なるショーであって（カトリックの）真実とは違うことを願っ

[H-131] PISCES FISH

面白いタイトルだ。pisces は、ラテン語 piscis (魚) の複数形。Pisces と書くと、天文ならびに占星における魚座 (the Fishes) のことで、これを英語の形容詞として用いると、「魚座生まれの」という意味になる。また、a Pisces (魚座生まれの人) という表現も可能。他方、fish は人 (奴) を指すこともある。そこで、魚座生まれのハリソンが自身を a Pisces fish (魚座生まれの人間) と呼ぶのは、理にかなったユーモアである。

それだけではない。コーラス後半の and the river runs through my soul では、人生の流れ (自身の靈魂の行動) を川に喩えている。その前の I'm a Pisces fish がぴったりはまる。

歌詞は、自転車を押して歩く話者 (ハリソン) が、川岸の土手から見る光景、感じる印象、めぐらせる思索を綴ったもの。『まるで、ジョージが空から世界を眺めているよう』という CD の説明書きを書いた人は、ヴァース 1 の ... the river ... along the bank ... my bike ... begins to quiver にまったく注意を払っていない。自転車に乗っていないのは、チェーンが後輪から外れたためである。

ヴァース 2 は、辺りで見かけた老婦人たちの行動を描いている。加えて、農夫。彼は話者に愚痴をこぼす。彼の牛がいわゆる狂牛病 (mad-cow disease) に感染してしまい、「殺処分になるところ」だと言う。『彼の狂った牛たちが眠らされてしまった』という対訳は、正確ではない。put to death ではなくて put to sleep とあるのは、安楽死という感じを出すだけでなく、all the sheep との脚韻のためである。

ヴァース 3。smoke signals from the brewery の signals が名詞なのか自動詞なのか、なぜ in a vat of beer that keeps ... が a vat of beer keeps ... でないのか、疑問を抱かせる。であっても、ハリソンが言いたいことは理解できる。ビール製造の仕込み工程における煮沸から生じる湯気、もしくは何らかの白い煙 (『のろし』とは考えられない) が、ビール工場から立ち上っている。これを見た話者が、コンクラベ (本書 120 ページ) を連想したのだ。他方、近くの教会で鐘を鳴らそうとする人が鐘つきロープに絡まっていると言う。つまり、教会が自らの首を絞めていると暗示させている。私の感想は、率直に述べると、[P2 Vatican Blues] で聞いたば

次のトラック〔Between The Devil And The Deep Blue Sea〕はオリジナル楽曲ではないので、本書では歌詞の読解を行わない。

### 〔H-138〕 ROCKING CHAIR IN HAWAII

このトラックを二三回聴いて、私の頭に浮かんだ光景は次のようだ。話者はゆううつな気分。揺り椅子を携えて、川辺へ行く。そこには、肩と太もみを露出した服装の女がいる。話者は、この女に言い寄ることを想像する。私の読みを詳しく説明しよう。

ヴァース 1 は明解。ここに描かれるのは、話者自身と、その気持（これからしようとする意向）だけである。それなのに、CD の対訳には『いっしょに』が付け加えられている。一体全体、誰と一緒になのか？ ヴァース 2 で描かれる女ではありえないことは、後述する。

『これからそのままロックしていこう』という対訳も、おかしい。錠前または音楽のここのように聞こえる。And if those blues don't leave me, (I'm) gonna rock on away from here. の rock は、素直に文脈をたどれば、「揺り椅子に座って体を揺する」という意味である。そこで、このラインは、「もしゆううつな気分のままだったら、このロッキングチェアを揺すり続けて、遠くへ行ったような気になればいいさ」のような和訳になる。

ヴァース 2 は、話者が女に話し掛ける内容。と言っても、実際に口に出してはいないと、私は推察する。話者が頭の中で思うことである。この女は話者の知人ではない。通りすがりの人である。そうでなければ、話者が please don't pass me by と言う（思う）はずがない。

『はすに見るその視線が好きさ』も誤訳。I love those sideways glances – your shoulder and your thigh. は、「肩と太ももの、横からの眺めがいいね」という意味である。話者は、目の前を素通りする女の体を描いているのだ。女が話者に目を向けたわけではない。そして、ハリソンが glance という語を用いたのは、露出する肩と太ももがきらめく感じを出すためと考えられる。looks では平凡。また、あえ

勢に乗った僕たちは、あっと言う間に、大見出しの新聞記事に載るようになった」という意味である。

そして、歌詞の最後のライン。どんな人が聞き起こしをしたのか知らないが、『I think love is about you』では、まともな英語にならない。それに気付かずに『愛は君そのものだと思うんだ』などと和訳する対訳者。嘆かわしい。ハリソンのファンならば、アルバム ALL THINGS MUST PASS にあった〔I Dig Love〕が脳内に保存されていて、ちゃんと“I Dig Love” is about you. と聞こえたはずだ。まして、コーラスの1回目と2回目では“Here Comes The Sun” is about you.、3回目では Within you, without you. だった場所である。

このように、そしてブリッジには All Things Must Pass が織り込んであって、ハリソンの4作品が思い出された。その前には、ハリソンとスターとが共にビートルズのメンバーだったことへの暗示。特に、英国では1962年から、米日では1964年からのハリソン・ファンには、頭だけでなく、心に響く歌詞だ。

ヴァース2冒頭の Here today, not alone, with my memories. は、ポール・マッカートニーによるジョン・レノン追悼歌〔Here Today〕の影響だろうか？

## 〔S-065〕 IMAGINE ME THERE

穏やかで美しい旋律のヴァース1とヴァース2を聴いて、私は1967年頃のドノヴァン(Donovan)を思い出してしまった。ところが、コーラスでは盛り上がりを見せ、後にはエリック・クラプトンによるギターソロ。めりはりの利いたサウンドに乗る歌詞はどうかと言うと、優しい心が表れている。

久し振りに聴き惚れたのは良かったが、CD付属の対訳を見て、がっかり。またしても、誤訳が、ナイーヴなバイヤー／リスナーを欺いている。説明しよう。

まず、コーラス内の『僕らの人生すべてを 想像してごらん』だが、all our lives は、imagineの直接目的ではない。Let the dawn break without heartache all our lives. (生涯ずっと毎日、晴れやかな気持で朝を迎えよう)という構文である。

〔M-316〕 **A LOVE FOR YOU**

マッカートニーが絶叫調で歌う、アップテンポのロッカー。元々は、1971年のアルバム RAM 用に録音されたものの、蔵入りとなった。1986年にはアルバム COLD CUTS 用にリミックスされたが、このアルバム自体が棚上げになってしまった。そのような経緯から、この楽曲は、マッカートニー個人名義の音盤としては、2012年発売の RAM Deluxe Edition に収録されている。

THE IN-LAWS で使われたのは、2002年のリミックス。中間部を長くするとともに、アウトロのフェードアウトを遅くしている。その一方、リードボーカルと歌詞は1986年のリミックスと変わらない。私の耳には下記のように聞こえる。

ヴァース 1: When you met me, everything was rosy. And you let me. Everything was sure to work out fine. And if you go, everything that's rosy turns to pieces. You know, everything will go under, believe me. 。 rosy (バラ色の) は、日本語の発想としても定着している。

コーラス 1: Where will I run to, where would I hide, if you ever leave me by my side? Where will I run to? What would I do? I really will, I really can, I really do, I really have a love for you. 。

ヴァース 2: Now, if you get me, that could save us thousand conversations. Don't upset me. Everything is cozy here tonight. If I moved, you'd be standing by. It would make a difference. Is it true? Are you coming through, or were you just leaving?。「僕と心が通じれば、無駄な話をしなくてもいい」には、私としては納得。

コーラス 2 は、コーラス 1 とほとんど同じ。違いは、What would I do? に替えて Baby, where would I hide? 。そして末尾に Yes, I do. Yes, I do. が付け足されている。

ヴァース 3: When you met me, everything was rosy. When you let me, everything was sure to work out fine. Oh, oh, oh ... Baby, baby, baby ... Oh, oh, oh ... Don't you ever leave me. 。